

一万時間の法則

マルコム・グラッドウェルは、どんな才能も技能も、1万時間練習を続ければ本物になるといっています。

確かに、1万時間という長さは半端ではありません。毎日2、3時間休みなく練習を続けるとして、1万時間をクリアするためには10年はかかります。

例えば、趣味が昂じて玄人はだしの人がありますが、そんな人の話を聞いてみると10年以上続けているというケースが殆どで、「好きこそものの上手なれ」とは良くいったものだと感じます。

今や、独特の語り口でテレビでも大人気の戦場カメラマン渡部陽一さんは、「石の上にも15年」と師匠から教わり、ひたすらその道を歩いてきて「石の上にも、今19年」になるそうです。

長く、売れない時代が続きました。彼は、生活のままならないフリーのカメラマンが次々と辞めていく中、バナナの積み下ろし作業をしながら戦場に行く費用と生活費を稼いでいたといいます。

また渡部さんは、師匠から「15年続ければ、砂漠の中の一粒の砂金のように、一つだけでも形になる」といわれたそうです。師匠は「たとえ砂漠の中の一粒の砂のようなモノであっても、大きな価値を持つものがある」こと、そして「その価値あるものに出会うことは、砂漠の中から一粒の砂金を見つけるほど大変なことである」ことを伝えたかったのではないかと、私には思えます。

「石の上にも3年」という言葉があります。今では死語になりつつあるようにも感じます。

折角就職した若者が、たった一日で辞めてしまったという話を幾度となく耳にしています。そこまで極端ではないにしろ、嫌なら後先考えず、すぐに辞めてしまう若者が多いことは事実です。

すっかりこらえ性が無くなってしまった、ということでしょうか？ しかし、

全ての若者が、そうではありません。自ら選んだ道に、まっしぐらに、青春の全てを掛けて取り組んでいる若者もまた沢山います。寝る間も惜しみ、朝から晩まで一つのことに集中すると、3年も経てば1万時間になりますね。「石の上にも3年」というのは、その位やれば、おのずから道が開けるということであり、何の努力もせず、ただ石の上に3年座っていれば何とかなるというものではありません。

また、こらえ性が無い若者には、自分のやりたいことが分からないことや、自己肯定感の不足ということがあのように思います。

渡部さんが、石の上にも19年間頑張り続け、なおかつ今も頑張り続けることができるのは、自分にやりたいことや目標がハッキリしているからだと思います。

若者達のこらえ性のなさを嘆く前に、我々教育に関わる者として、やるべきことは沢山あるはずです。(塾頭 吉田 洋一)